

富山県婦中町

# 各願寺前遺跡 発掘調査報告

1994年3月

婦中町教育委員会

## 序

立山連邦、そして富山平野を一望出来る婦中町北西部の呉羽丘陵の麓で、中世に越中の北敷山として隆昌をきわめたと伝えられる各願寺があります。その各願寺の隣接地で個人住宅建設に先立ち、平成4年12月より試掘調査、そして平成5年に入り本調査を実施しました。その結果、縄紋時代・中世の遺物及び遺構が発見されました。ここにその調査の成果をまとめ、各願寺を中心とした地域史の調査研究を進める上での参考にしていただくとともに、地区の方々の埋蔵文化財についての理解を深めていただければと思っております。

終わりに調査にご協力いただきました、地元の方々をはじめ関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

平成6年2月

婦中町教育委員会  
教育長 清水信義

## 例 言

- 1 本書は、個人住宅建設に先立ち実施した、婦中町各願寺前遺跡の発掘調査の報告である。
- 2 調査期間・発掘面積は以下のとおりである。  
調査期間 平成5年5月17日～同年6月10日（実働17日）  
発掘面積 約320m<sup>2</sup>
- 3 調査は、婦中町教育委員会が主催した。調査費用は、婦中町教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。現地調査・遺物整理にあたっては、富山県埋蔵文化財センターからの職員の派遣を受けた。
- 4 調査事務局は、婦中町教育委員会生涯学習課に置き、文化係長見波重尋が調査事務を担当し、課長清水隆吉が総括した。また、調査に当たっての作業員の確保については、婦中町シルバー人材センターの協力を得た。
- 5 試掘調査・発掘調査担当者は次のとおりである。  
試掘調査 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 岡本淳一郎  
富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 島田修一  
本調査 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 高梨清志  
婦中町教育委員会 主事 片岡英子
- 6 本書の作成・遺物整理にあたっては、下記の方々からの種々のご援助を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略 五十音順）  
安念幹倫・宇野隆夫・越前慶祐・岡本淳一郎・久々忠義・斎藤啓・酒井重洋・塙洋子
- 7 本書の執筆は富山県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得て片岡・狩野・高梨が行い、編集は片岡が行った。個々の責は文末に記した。
- 8 本書の土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著 1967『新版標準土色誌』㈱日本色研事業に準拠している。今回参考とした色相はHue7.5YRである。
- 9 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
  - (1) 方位は真北・水平基準は海拔高である。
  - (2) 基準杭は調査区の北側を通る道に沿って、任意に2点の基準点を設定した(X15・Y5～X15・Y10)。  
なお、基準杭のX軸は真北から21°39'40"西へ偏る。
  - (3) 通構の表記は次の記号を用いた。  
溝：SD 穴・土坑：SK ピット：SP 井戸：SE
  - (4) 挿図の土器の縮尺は、繩紋土器は1/2、陶磁器類は1/4、その他は1/3に統一した。写真図版の遺物の縮尺は、原則として1/2とした。
- 10 出土品及び記録資料は、婦中町教育委員会が保管している。
- 11 遺物整理参加者は次のとおりである。  
生田寿美子・中坪千春

## 本文目次

序 文
例 言
目 次
I 序 章..... 1
1 遺跡の位置と環境..... 1
2 調査に至る経緯..... 2
II 調査の概要..... 3
1 調査の経過..... 3
2 通 構..... 3
3 遺 物..... 6
4 まとめ..... 8
引用・参考文献
写真図版

## 挿図目次

第1図 地形と周辺の遺跡
第2図 調査区位置と遺跡範囲
第3図 第2次調査平面図
第4図 第2次調査出土遺物
第5図 地形と調査区割図
第6図 基本層位図
第7図 各願寺前遺跡通構配置図
第8図 SK19・20・22・47・56・57・70・71・73 74、S P44・46
第9図 SK14・15・23・27・75・76・77・101、 S P16・17・18・24・31・32・33・34・35 36・37・88
第10図 出土遺物実測図
第11図 出土遺物実測図

# I 序 章

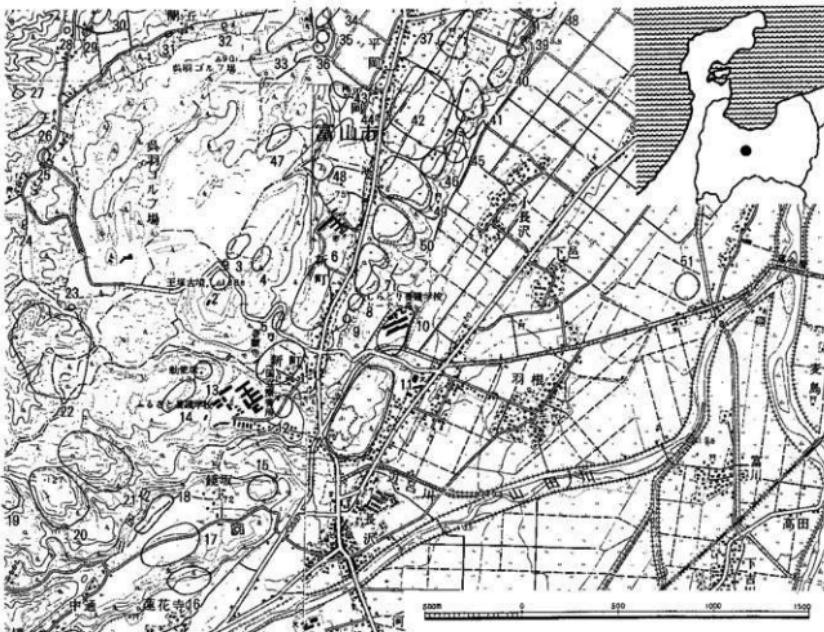
## 1. 遺跡の位置と環境（第1図）

婦中町は、富山県のほぼ中央部に位置し、町の東端に沿って神通川が北流する。地勢は、平野部と丘陵部に分かれ、町西部の平野部には神通川とその支流である井田川によって形成された扇状地が広がる。一方、町東部の丘陵部は富山県の地勢を東西に分ける呉羽丘陵から射水丘陵を経て牛岳に連なっている。

本書で報告する各顧寺前遺跡は婦負郡婦中町新町地内に所在し、呉羽丘陵の南西部に連なる羽根丘陵に立地している。遺跡のある新町地区は、羽根丘陵の東側裾野にあり、井田川の支流である山田川の左岸に位置する。この一帯では、県道八尾小杉線に沿って集落が形成されている。

当遺跡の周辺には、旧石器時代から中世に至るまで数多くの遺跡が存在し、富山県内の遺跡の密集地帯の一つをなしている。主な遺跡としては千坊山遺跡（旧石器・繩紋・古墳時代）、王塚古墳北遺跡・古里保育園前遺跡（繩紋時代）、新町Ⅱ遺跡（繩紋・奈良・平安・中世）、王塚・動使塚古墳（古墳時代）、新町Ⅲ遺跡（古墳～平安時代）、新町Ⅰ遺跡（奈良・平安時代）、家老屋敷城跡・長沢城跡・鶴ヶ城跡（中世）などがある。

当遺跡のすぐ北側には、古代から丘陵地帯の仏教文化の中心をなしてきたとされる各顧寺がある。各顧寺は建武二年（1335年）に、越中の守護普門俊清と国司中院定清の戦いに巻き込まれて兵火により失われた。しかしこの後、200余年を経て、大永三年（1523年）に玄弘僧都に再建されて今日に至っている。【婦中町1967】（片岡）



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/25,000)  
1.各顧寺前遺跡 2.三層古墳 3.三層古墳北遺跡 4.羽根北遺跡 5.新町六基 6.新町Ⅱ遺跡 7.新町Ⅲ遺跡 8.新町岩出跡  
9.新町大穴 10.裏ノ山古墳 11.千坊山古墳 12.古里保育園前遺跡 13.動使塚古墳 14.五つ星 15.鶴ヶ城跡 16.高尾丘 17.鶴ヶ城跡 18.鶴ヶ城跡 19.鶴ヶ城跡 20.長沢城跡  
21.家老屋敷城跡 22.苦谷城跡 23.三馬鹿原 24.三馬鹿原 25.三馬鹿原 26.三馬鹿原 27.三馬鹿原 28.三馬鹿原 29.三馬鹿原 30.三馬鹿原 31.三馬鹿原 32.羽根丘陵跡  
33.鶴ヶ城跡 34.御防山遺跡 35.問ヶ丘東Ⅰ遺跡 36.問ヶ丘東Ⅱ遺跡 37.野下遺跡 38.越前日遺跡 39.鶴ヶ城跡 40.鶴ヶ城跡 41.小長沢 42.平尾遺跡 43.平岡神社裏遺跡  
44.平岡遺跡 45.小長沢古墳群 46.宮ノ高A遺跡 47.浜河カントリー内遺跡 48.新町遺跡 49.宮ノ高B遺跡 50.二木復Ⅱ遺跡 51.鶴ヶ城跡

## 2. 調査にいたる経緯(第2~4図)

各廟寺前遺跡は、従来、長沢遺跡と呼ばれており、過去においては2回の調査が行われている。昭和60年の発掘調査では柱穴・穴・溝を検出しており、溝から多数の珠洲が出土している。遺物は縄文土器・石斧、中世土師器・珠洲、銅器(仏具)が出土している。第2次の昭和62年の調査では東西に走る中世の溝を検出している。遺物は縄文土器、須恵器、土師質土器・珠洲

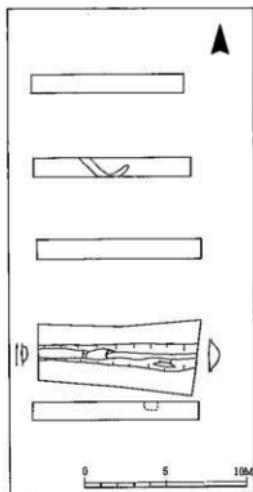


第2図 調査区位置と遺跡範囲 (1/5,000)

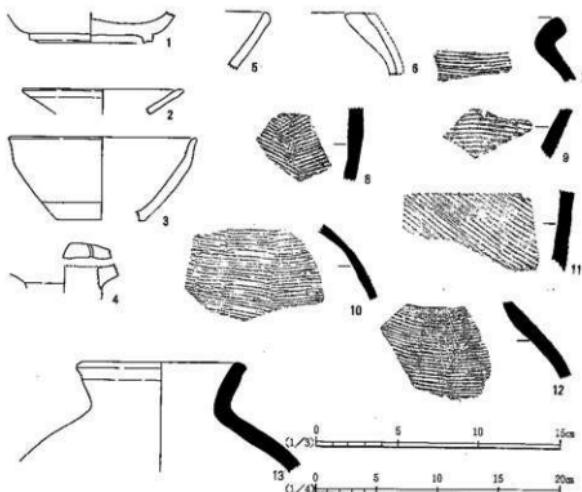
・越中瀬戸・瀬戸美濃・青磁が出土している。第1・2次の調査により当遺跡は縄文時代と中世の複合遺跡であり、中世に関しては仏具などの出土遺物から各廟寺に関連する遺構の可能性が高いと言えよう。

今回は第3次調査にあたる。平成4年11月個人住宅建設に伴い、申請地が遺跡の範囲に含まれたため婦中町教育委員会と申請者で事前協議を行い、同年12月3日試掘調査を実施した。試掘調査の結果、対象地全体から縄文時代の遺物及び遺構を確認したため、翌平成5年度に本調査を行うことになった。

(高梨)



第3図 第2次調査平面図



第4図 第2次調査出土遺物 (1/3, 7~13は1/4)

## II 調査の概要 (第5~6図)

### 1. 調査の経過 (第5図)

調査はまず試掘調査の結果をもとにバックホウによる表土除去を行い、ついで調査地区に対応して基準杭を設置した。その後人力による遺構の検出及び図化作業を行った。調査面積は約320m<sup>2</sup>、調査期間は平成5年5月17日から同年6月10日までの17日間実施した。

### 2. 遺構 (第6~9図)

検出した遺構は、溝状遺構3条、土坑、柱穴である。

#### (1) 基本層位 (第6図)

基本層位は調査区の北東壁部 (X15・Y10~Y11) で、

I a層：茶褐色土、I b層：茶褐色・黒褐色混合土、II a

層：黒褐色粘質土、II b層：茶褐色・赤褐色混合土、II c

層：茶褐色土、III a層：黄褐色シルト層、III b層：粘質土層、III c層：礫層である。

I層が現表土とこれに伴う盛土、II層が旧表土で過去2回の田直しが行われている。

III層は自然層で、中世と繩紋の遺構構築層である。もとは中世・繩紋とも別の遺構面をもっていたと思われるが、過去の田直しにより削平、擾乱を受けている。特に調査区西側は削平が激しく、III a・b層も削平されていた。

#### (2) 繩紋土器を出土した土坑 (第8図)

繩紋土器のみを出土した土坑と中近世の土坑とを区別したが、後世の擾乱が激しく遺物が混入した可能性があり、必ずしも遺構の時代を表すものではない。

SK19 長辺約1.1mの方形を呈する土坑で、SK20に切られる。

SK22 円形の土坑で、長軸90cm、短軸80cmで、深さは78cmを測る。

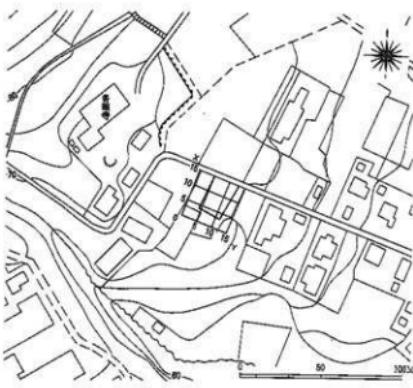
SK47 長軸85cm、短軸75cm、深さ16cmを測る。SP46に切られる。

SK56 長軸90cm、短軸80cmで、深さは45cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒色粘質土であり、上層には石が見られる。湧水層である青灰色砂質土+礫層まで達するので井戸の可能性もあるが、ここでは土坑として扱う。なお、遺物は無いが、これと似た土坑はSK57とSK74がある。SK57は長軸80cm、短軸76cm、深さ74cm、SK74は長軸75cm、短軸70cm、深さ90cmを測る。

SK73 長軸65cm、短軸60cm、深さ17cmを測る。

#### (3) 中近世の土坑 (第9図)

SK27・75・76・77 SK27は長軸200cm以上、短軸140cm、深さ25cmの大型の土坑である。SK75は、長軸63cm、短軸55cm、深さ25cmを測る不整形の土坑である。SK76は、長軸130cm、短軸50cmの細長い楕円形を呈し、深さは10cmと浅い。SK77は、長軸84cm以上、短軸78cm、深さ28cmの土坑である。SK27は、他の3遺構に切られる。4遺構とも繩紋土器が出土した他、SK76からは中世土師器(3・4・5)、SK27からは、須恵器、中世土師器(7)が出土した。



第5図 地形と調査区割図

V	V	V	V	V
I a				
I b				
		II a		
II b				
		II c		
III a				
III b				
III c				

第6図 基本層位図

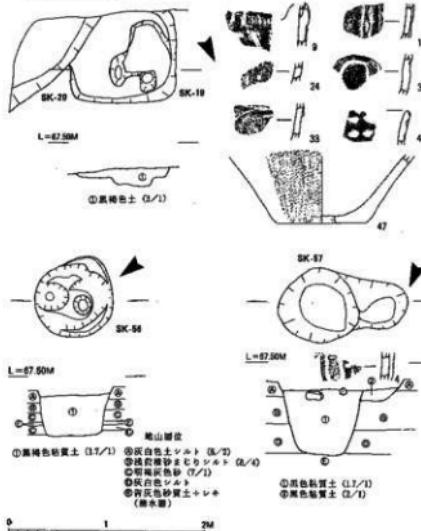
SK14・15 SK14は長軸170cm以上、短軸90cmで、中央に1辺50cm、深さ28cmの方形の凹みがある。底面には石がいくらか見られる。SK15は長軸190cm以上、短軸140cm、深さ28cmの大型土坑である。北側はSK14によって切られている。遺物は、2遺構とともに繩紋土器(21・36)と中世土師器(1)が出土している。

SK101 長方形のプランを呈し、長軸158cm、短軸105cm、深さ16cmを測る。遺物は、美濃焼端反皿(10)が出土した。

#### (4) ピット(第9図)

調査区東側の中央から南にかけて集中する。80のピットのうち、柱痕が残っていたものは41基と半数を数えるが、これらで構成される建物は確認し得なかった。

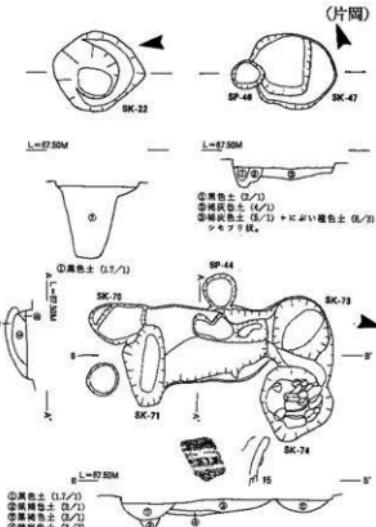
覆土の色調は、茶・黒・灰色に大別され、切り合ひ関係などにより、茶・黒・灰色の順に新しく、茶・黒色は中近世のものと考え得る。平面形は、掘り方・柱痕ともに円形。方形の2種があり、円形が大半を占める。掘り方の規模は、直径は30cm~50cm、深さは15cm~25cmのものと、少数ではあるが深さ50cm~65cmのものがある。一方、柱痕は、直径は15cm~25cm、深さは15cm~20cmのものと、やはり数は少ないが50cm~60cmのものと分けられる。

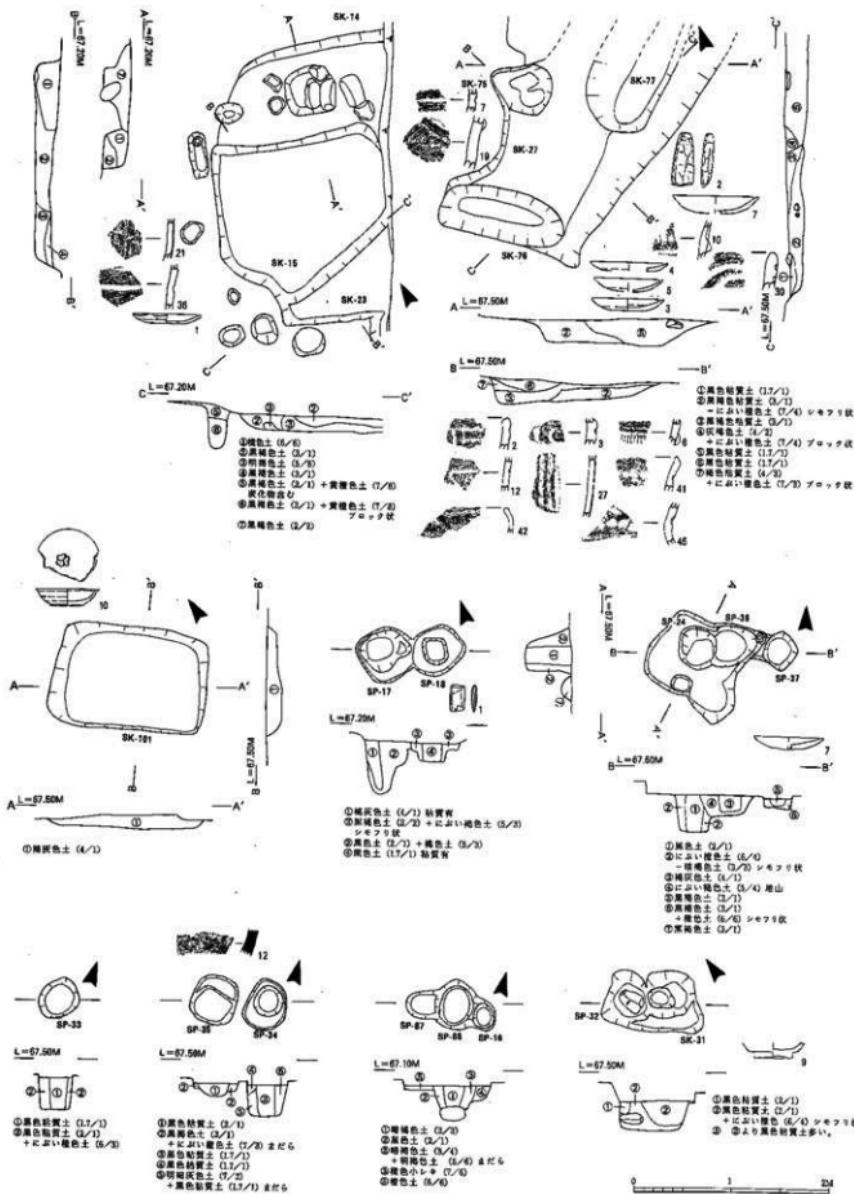


第8図 SK 19・20・22・47・56・57・70・71・73・74、SP 44・46 (1/50)

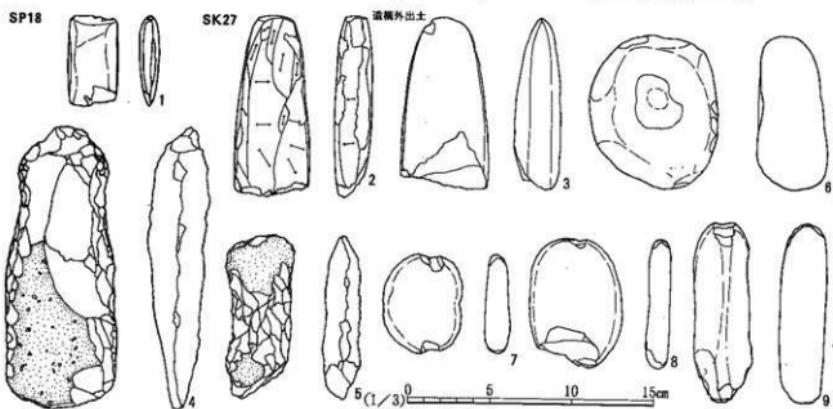
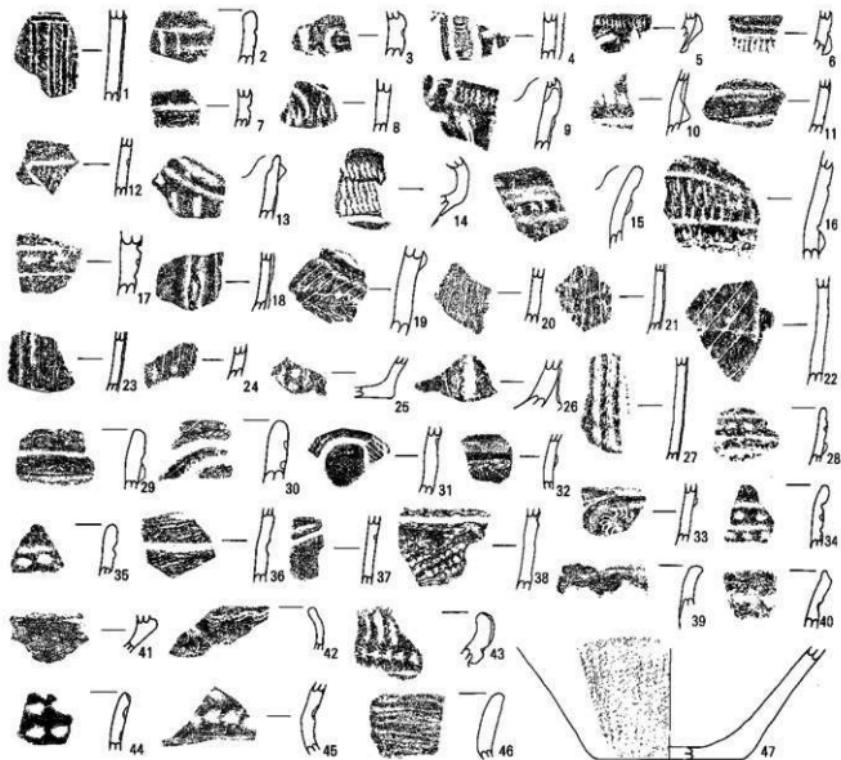


第7図 各類寺前遺跡遺構配置図 (1/200)





第9図 SK14・15・23・27・75・76・77・101、SP16・17・18・24・31・32・33・34・35・36・37・38 (1/50)



第10図 出土遺物実測図 (1/3)

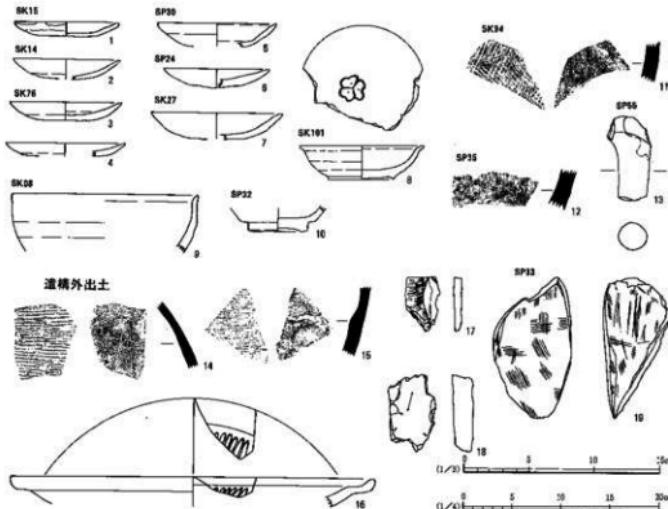
### 3. 遺物 (第10~11図)

調査により出土した遺物には、縄文時代の土器・石器、中世の土師器・珠洲・瀬戸美濃・青磁、中近世と思われる土製品と砥石があるが、全体に細片で遺存状態は良くない。

#### (1) 縄文時代 (第10図)

**土 器** 1は縄文地に細い粘土紐を貼り付けるもので、前期後葉の福浦上層式に比定される。2~8は比較的幅広の半隆起線文を引き、隆帶上は3・5・6がヘラ状工具で刺み、4はクシ状工具で刺突するもので、中期中葉の後半と思われる。9~13は中期後葉の串田新I式で、9・11には貝殻腹縁文が施される。10・13は隆帶間に短沈線を引くもので、同式の特徴とも言える。15~28は中期後葉の串田新II式で、15・16は隆帶上を荒く刻む。17~28は横位の沈線間に列点を施す。19・22は葉脈状文を施す。18・20・21・23・24は縦位の隆帶と沈線又は、沈線で文様を構成する。25~27は縦位の隆帶を貼る。34~39は中期末の岩崎野式と思われ、幅広の沈線と沈線間に雨垂れ状列点 (37・38) 等を特徴とする。41~45は後期前葉の気屋式で、42は波状沈線を施すもので気屋1a式 [米沢1989]、43~45は三角形刺突文を施し気屋1b式と言える。46は横位の条痕文を施すもので晚期中葉の中屋式と思われる。

**石 器** 磨製石斧3点、打製石斧2点、凹石1点、石錐3点が出土した。石質は磨製石斧の1~3は1が片麻岩、2は蛇紋岩、3は硬質砂岩である。打製石斧は4が凝灰岩、5が蛇紋岩で、形的には短冊形と言える。凹石の6は1面に1箇所の瘤みが見られる。石錐は6が凝灰岩、7・8が硬質砂岩で、6・7は扁平な円錐の長軸の両端に糸掛けを作出する。8は細長い錐の先端部に、糸掛けと思われる剥離があり石錐と考えた。  
(狩野)



第11図 出土遺物実測図 (1~10・16~19は1/3、11~15は1/4)

## (2) 中世(第11図)

1～7は中世土器である。すべて非ロクロで口縁を軽くなっている。1・2は口縁部に煤が付着している。時期は16世紀後半である。8・9は美濃の天目茶碗、10は美濃の端反皿で灰船がかかり、底部には輪トチンの跡が残る。11・12・14・15は珠洲の甕の胴部片である。16は青磁の盤で、口径28cmを測る。13は土製品の一部である。17～19は磁石で遺構外から出土している。

(高梨)

## 4. まとめ

各願寺前遺跡は繩紋時代の遺跡として大正時代からその存在は知られていた。また、遺跡の西に隣接する各願寺は『婦中町史』によれば古刹として知られ、中世では北畠山と称し京都の比叡山に相対する勢力を有したと言われている。今回の第3次調査地区は戦後の田なおしなどの整地により、遺構構築層(Ⅲ層)の削平が激しく、特に西側ではⅢ層は完全に削平されており、遺存状態は良くない。しかし、Ⅲ層が残っていた調査中央部では遺構密度はかなり高く、整地前は全体的に遺構密度は高かったことが想像される。ここでは今回の調査成果を繩紋・古代・中世に分けて要約してまとめておく。

### 繩紋時代

今回の調査により、繩紋土器は時期的に前期後葉から晩期中葉まで断続的に続く事が確認された。特に中期後葉のものが多く、繩紋時代の中心時期と言える。一方確実に繩紋時代と考えられる遺構は確認できなかったが、出土遺物から周辺に集落跡が存在すると思われる。

### 古代

今回の調査では須恵器の甕の胴部片が遺構外からの出土のみで、当時期の遺構は確認されず古代の様相は不明である。

### 中世

今回出土した中世の遺物は16世紀中頃に属するものが大半を占めている。出土量は整理箱に1箱程度と少ないが過去2回の調査成果を含めて考えると隣接する各願寺に関連する遺構の可能性は否定できない。今回の調査では遺構構築層が残っていた中央部付近で約80基のピットを確認し、その内半数の41基で柱痕跡を確認した。覆土から繩紋土器が出土した例も見られたが、混入した可能性が高い。ピットは切り合ひ関係と覆土の色から近世と中世の2時期に分けられる。これらのピットは建物を構成するには至らなかったものの建物が16世紀後半から建てられていたことがうかがえる。町史によれば各願寺は701年に創建され、1335年に中絶、1523年に復興されている。この記述に従えば今回出土した中世の遺物は各願寺復興直後のものといえよう。

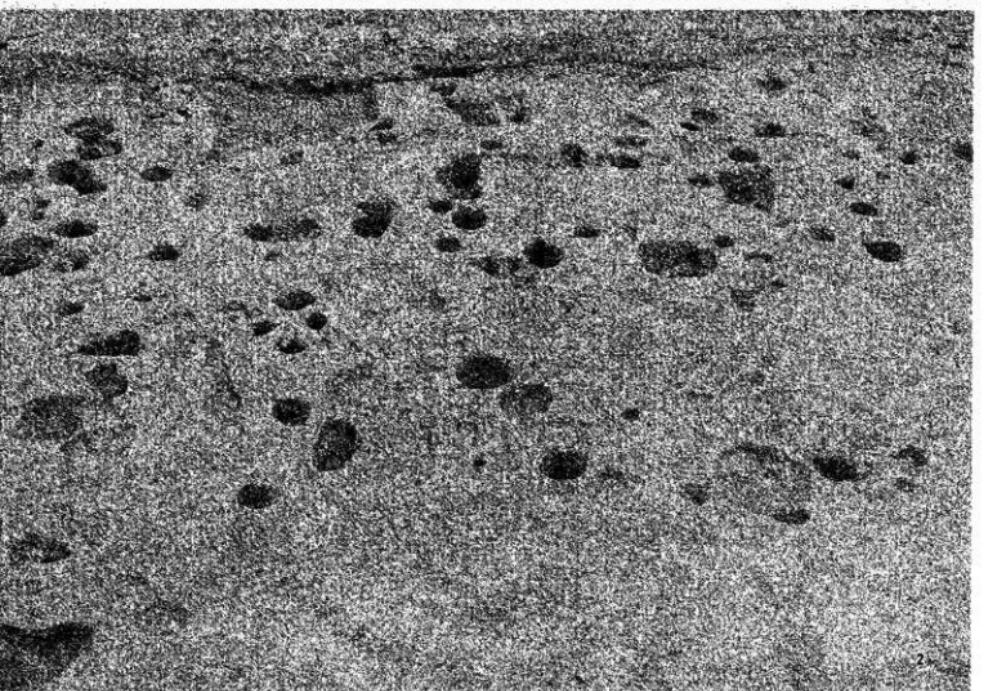
(高梨)

### =参考文献=

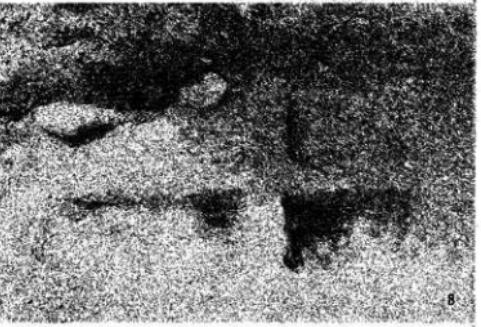
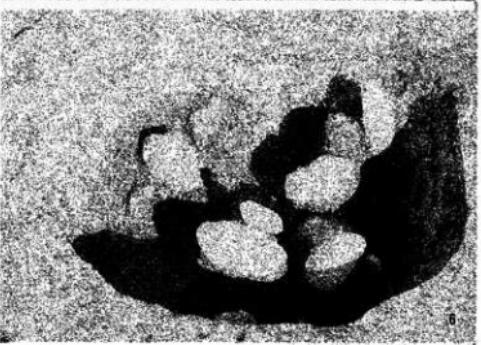
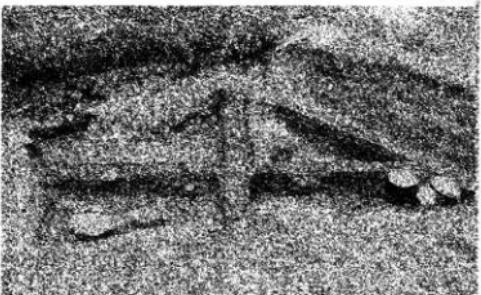
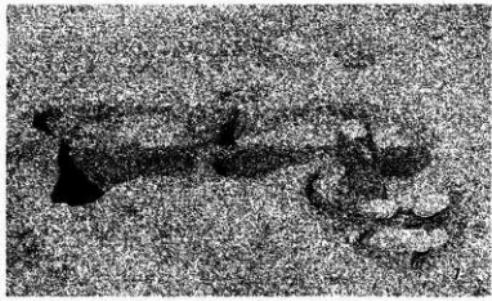
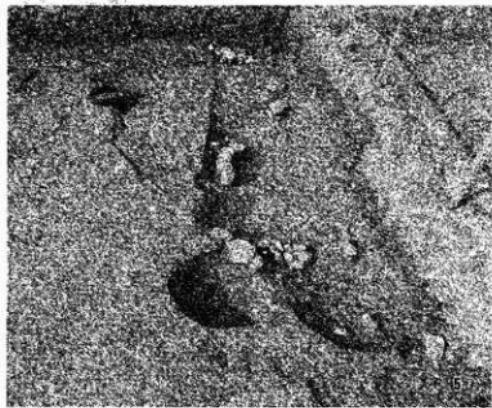
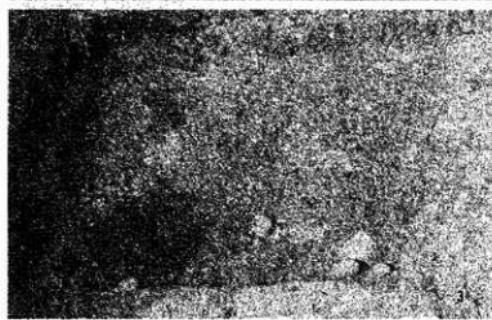
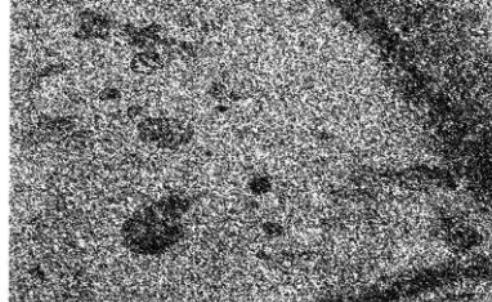
- |            |                               |
|------------|-------------------------------|
| 吉岡康輔       | 1989 「珠洲の名陶」 珠洲資料館            |
| 脚富山県文化振興財団 | 1990 「東海北陸自動車道関連発掘調査概報(1)」    |
| 脚富山県文化振興財団 | 1991 「東海北陸自動車道関連発掘調査概報(2)」    |
| 脚富山県文化振興財団 | 1992 「東海北陸自動車道関連発掘調査概報(3)」    |
| 野崎雅昭       | 1974 「肯構宗達錄 越中国取りの期」          |
| 婦中町        | 1967 「婦中町史」                   |
| 北陸中世土器研究会  | 1991 「城館出土の土器陶磁器」             |
| 北陸中世土器研究会  | 1992 「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」      |
| 米沢義光       | 1989 「気屋式土器様式」 「繩文土器大観 4」 小学館 |



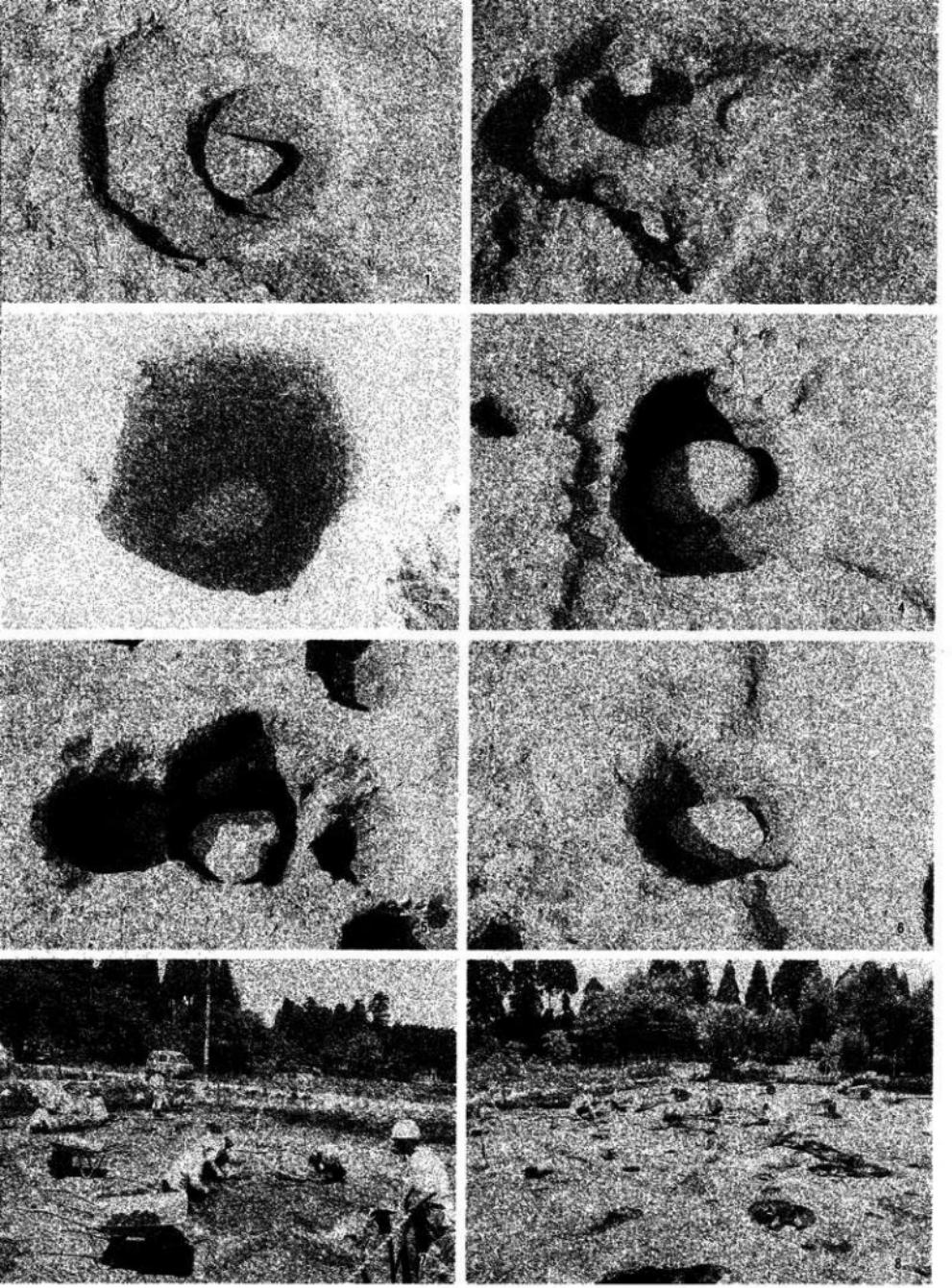
図版 1 1. 調査区全景（北から） 2. 南東部ブロック（西から）



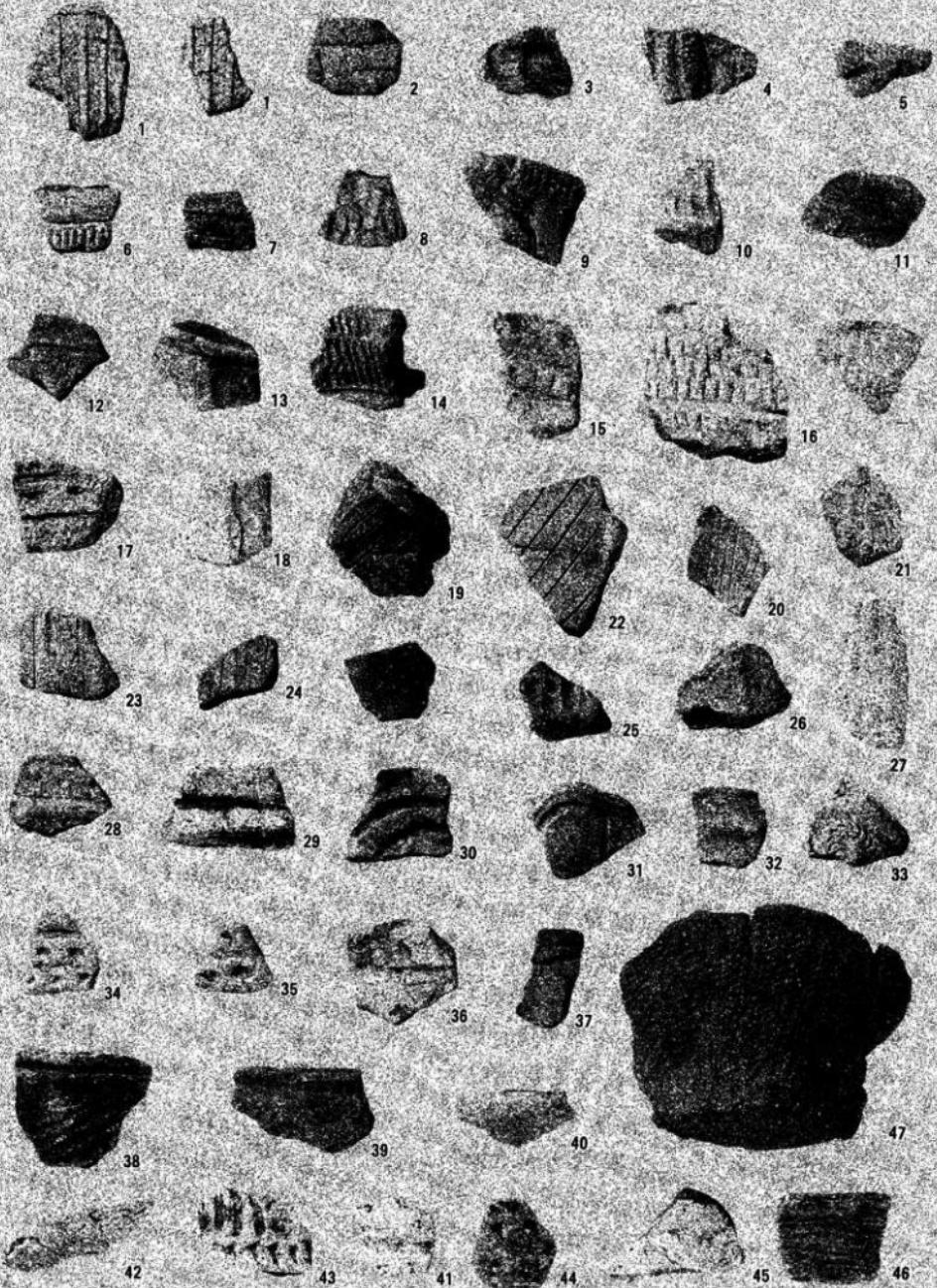
図版2 1. 南東部ブロック（北から） 2. 東部中央ブロック（西から）



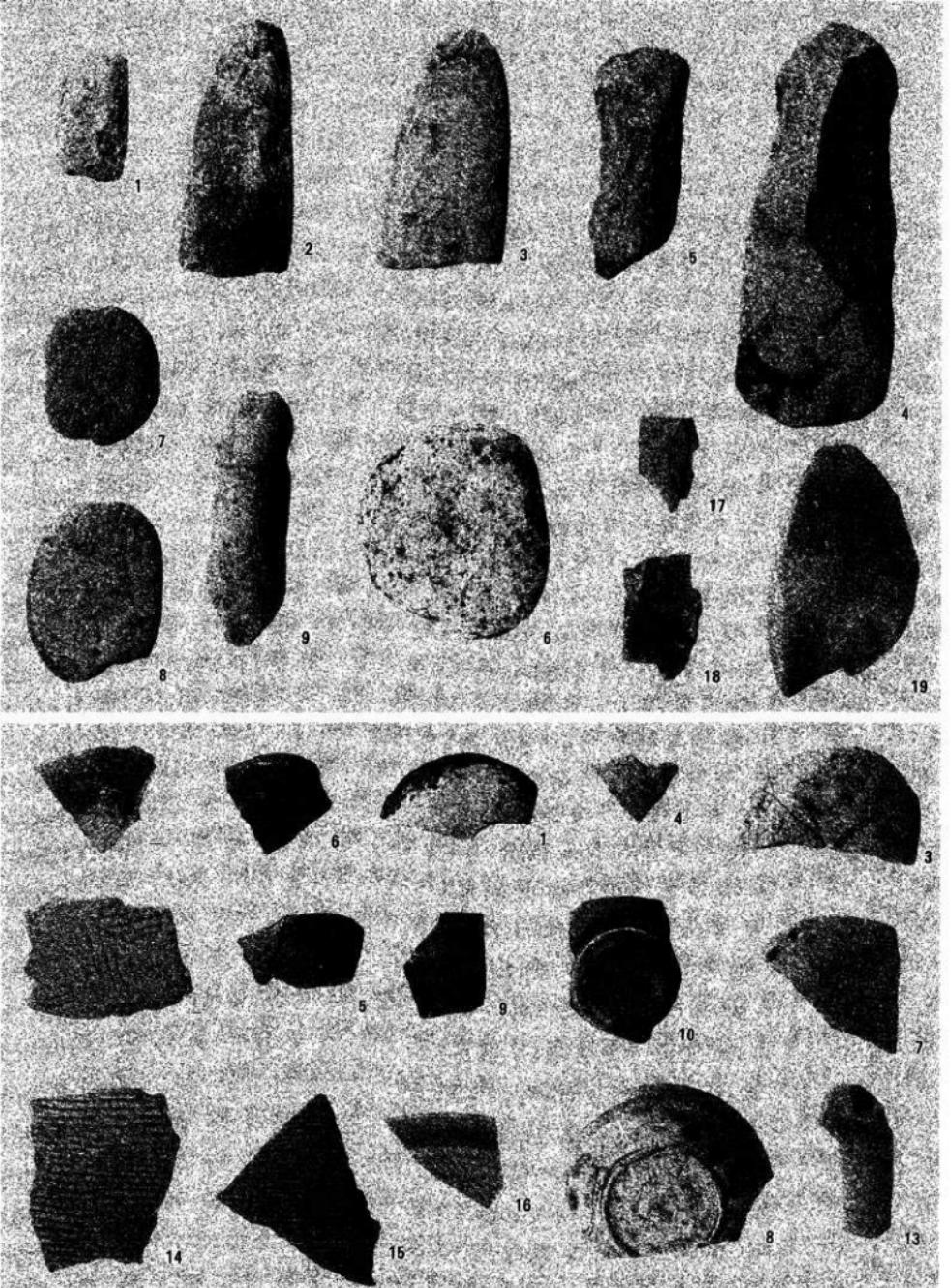
図版 3 1. 北西部ブロック（北西から） 2. 北西部ブロック（東から） 3. 4. SK27・75・76・77（南西, 南東から）  
5. 東側落ち込み（南西から） 6. SK56（西から） 7. SP44・SK70・71・73・74（東から） 8. SK19（北から）



図版4 1. SP13 2. SP24\*36\*37 3. SP38 4. SP82 5. SP88 6. SP111 7. 8. 作業風景



図版5 出土遺物 号番号は実測番号



図版6 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな 書名	富山県婦中町各願寺前遺跡発掘調査報告											
編著者名	片岡英子、狩野聰、高梨清志											
編集機関	富山県埋蔵文化財センター				婦中町教育委員会							
所在地	〒930 富山県富山市茶屋町206-3 TEL 0764-34-2814				〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111							
発行機関	婦中町教育委員会											
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL 0764-65-2111											
発行年月日	西暦 1994年3月31日											
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因					
各願寺前	富山県婦負郡 婦中町新町 569-3	016362 025	36°39'16"	137°7'24"	19930517~ 19930608	320	個人住宅 建設工事 に伴う事 前調査					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項							
各願寺前	散布地	縄紋	土坑2基 ピット	繩紋土器、石斧、中世土器、珠洲焼、 越前焼、美濃焼								
		中世	土坑16基 溝3条 ピット									

平成6年3月31日発行

### 富山県婦中町 各願寺前遺跡発掘調査報告

編集 富山県埋蔵文化財センター  
 婦中町教育委員会  
 発行 婦中町教育委員会  
 富山県婦負郡婦中町速星754  
 印刷 有限会社なかたに印刷